

## エッセイ



### クロード・ベルナールと私

黒島 晨汎

昨年（2015年）12月、私は、此の度の叙勲を機に、かねてより敬愛して止まない「生理学の父」クロード・ベルナール（1813～1878）の全集（全19巻）、および彼に関連する研究資料を、旭川医科大学図書館に寄贈した（写真）。そのほとんどが現在の日本では極めて手に入りにくい貴重書である。殊に全集の方は、現在、日本の図書館でこれを全巻揃って所蔵している大学は皆無と思われ、旭川医大の貴重な「お宝」となることは間違いない。

また、今回の寄贈に合わせ、本年（2016年）6月15日には、旭川医科大学フォーラム第100回記念の会において、「クロード・ベルナールと私 ～図書館へのベルナール全集寄贈を機に～」と題して講演することになった。

以下は、予定されているその講演内容のレジюмеの一部である。



1848年ベルナールはコレージュ・ド・フランスでの最初の講義を“これから私がここで話さなければならない科学的医学はいまだ存在しない”という言葉で始めた。それから1878年に没するまでの30年に亘るベルナールの生涯はまさしくそれまでの単に経験と観察に基づいていた医学（観察医学）を実験的探究に基づく科学的医学に変革するために捧げられたといえる。勿論ベルナールの展開した実験医学の世界がベルナールのみが主張した独創的なものとするのは正確ではない。ベルナールが説いた実験医学的方法論は、フランスでは彼の師マジャンデーが、またドイツではヨハネス・ミュラーとその門下のルドヴィヒ、ヘルムホルツ、デュボアーレイモン、ブリュッケら俊英たちによって相前後して推進されていた。しかしベルナールの自分自身の研究体験に基づく考察によって展開された議論はその後の医学の発展に大きな影響と有益な示唆を与えるものである。その主な思索の成果は次の2点にまとめられる。

#### 1 生理学、医学における研究方法の確立

『実験医学研究序説』（1865年）で研究における三段階の方法：「事実の観察—予備的説明（仮説）—仮説の検証」を具体的な研究で示し、生体の決定論的特性を明らかにした。

#### 2 生体の内部環境の認識の確立

最後の著作「動物および植物に共通の生命現象に関する講義」（1878年）のなかで次のように述べている。：“動物にとって実際には二つの環境、生体が置かれている外部環境と、組織の要素が生きている場である内部環境とがあるという考えを最初に主張したのは私である。”

“内部環境の定常状態が自由で独立した生命の条件である。”

“生命の機構はすべて、どのように変わっても、常に唯一の目的、すなわち内部環境のなかでの生命のための諸条件の統合性を維持するというにある。”

\* \* \*

私はこれまで、ベルナールの更なる理解に資するためにその足跡を辿ってみたいと、ベルナールの活動したフ

ランスの地を何度か訪ねてきた。以下は、かつて私が「北海道医報」第500号（1980年11月1日発行）に寄稿した「クロード・ベルナールへの旅」と題するエッセイの全文である。ここに転載し上記講演の参考に供したい。

今年の7月25日、パリ・ペレティエ通りのシャモナール古書店でベルナール全集19冊を眼にした時の感慨は終生忘れ得ない。夢にまでみた瞬間であった。夢にまでみたベルナールとの邂逅であった。19世紀の初めフランスは医学の分野で世界の先頭を切っていた。またフランスは現代医学の出発の地でもあった。現代医学は19世紀のパリを中心とした純粋に経験主義に基づく「病院の医学」と実験科学としての医学を目指す「研究室の医学」の統合の過程によって第一歩を踏み出した。このような医学の一大転換期の中心人物が「生理学そのもの」と言われた実験医学の祖、生理学者クロード・ベルナール（1813～1878）であることは彼の著書『実験医学研究序説』とともに良く知られている。彼の著作全集が没後3年を経て1881年に出版されてベルナール研究の基本的参考文献になっていることを知ったのは生理学の研究生活に入ってから間もなくであった。「科学は心を怠惰にさせる。どうか諸君、科学はもう少し少なく、技術はもう少し多く」と主張する人物が当時の医学界の大物として君臨し、観察と経験のみに基づく医学が主流であった時代に研究室の医学を主張し、現代医学の基盤を創りあげたベルナールは単なる優れた研究者であるばかりでなく医学の革新者として評価されるべきであり、この認識なしにベルナールを真に理解することはできないと考えられる。研究生活を通して段々とこのようなベルナールへの理解が深まるにつれて、彼の思索と業績を全体として追体験することが自分の選んだ道を進む上にどうしても必要なのだと思うようになってきた。そのためにはどうしてもベルナール全集を繙読しなければならない。しかし仄聞したところでは我が国ではベルナール全集は東北大学に所蔵されているのみで、個人の所有は分からないという。以上のような理由でこの十数年間ベルナールの全著作を手にしてその息吹を汲み取り、この偉大な医学者の理解と自分の発展のための推進力にしたいと願ってきた。そして欧米の主な医学専門の古書店のカタログを取り寄せ探索を続けたが遂に見つけることができなかった。1978年ベルナール没後100年記念シンポジウムが米国スタンフォードで開催されその記録単行本を手に入れて読むことができたが、やはり全集を持たなければの想いは募るばかりであった。

店主シャモネール氏と「自分は日本の生理学者で今ハンガリーの国際生理学会議からの帰路であり、持ち合せが充分でない。しかしベルナールは私の敬愛して止まない人物でこの全集（165,000フラン）は長年探していたもので是非欲しい。帰国してから工面をして送金するから待ってくれないか。」「よろしい、送料（480フラン）はこちら持ちで航空便で送ってあげましょう」と交渉が成立した。9月3日、待望のベルナール全集は無事届いた。この全集は全集のために再製版して印刷したものではなく、ベルナールの生前、没後に刊行された著作の初版を革装丁してそれに索引、評伝の一卷を加えて全集としてまとめたものである。手前に開いてあるのは『実験医学研究序説』の初版本（1865年）である。従って一冊一冊からベルナールが生き生きと話しかけてくれるような思いがする。今ベルナール全集を手を、妻や子に理解されることのなかった寂莫とした私生活を送ったが、医学界の巨匠として多くの人々から愛され、揺ぐことのない尊敬を勝ち得た我がベルナールの偉大な思索をどれ程わがものにできるであろうかと思い、心して励めと言いつけさせているところである。（1980.9.17記）

（くろしま・あきひろ 旭川医科大学名誉教授 元生理学第一講座教授 元図書館長）